

**戦前の東アジアにおける
アメリカ人女性による女子高等教育
——アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性
伝道協会 (WFMS) の活動を中心に——**

朴 宣 美

目 次

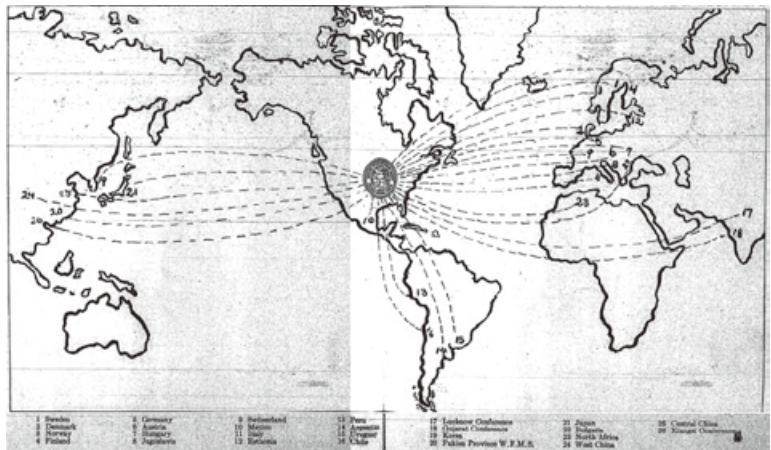
はじめに	37
第1章 東アジアにおける WFMS による女子教育	59
第1節 実態について	39
第2節 特徴として	42
第2章 東アジアにおける WFMS による女子カレッジ	46
第1節 実態について	46
第2節 認識について	50
おわりに	54

はじめに

1869年にボストンで結成されたアメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会 (Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church、以下、WFMS と略す) は、世界の各国・各地域に女性宣教師を送った。最初に1870年にインド、翌年1871年に中国、1874年に日本、1885年に朝鮮へ、それぞれ女性宣教師を派遣した。その他にも、南米 (1874年にメキシコなど)、アフリカ (1880年)、東南アジア (1887年にマレーシア、1900年にフィリピン、1907年にミャンマ)、ヨーロッパ (1886年にイタリアなど) へ女性宣教師を送りだし、WFMS はキリスト教の宣教活動を、世界を舞台に繰り広げたのである¹⁾。

WFMS の女性宣教師は、派遣地に赴任すると何より先に女子教育に着手した。彼女たちによっ

て設立された女子学校は、多くの場合その国・地域における最初の近代的女子教育機関であった。言い換えれば、WFMSは宣教地で女子教育を切り開いたパイオニア的な存在であった。さらに、WFMSは宣教地（主にアジア）で女子高等教育を実施するため、女子カレッジを



世界における WFMS の宣教地
WMF (1936, Mar.) より

設立した。それもほとんどの国・地域における最初の女子カレッジであった。これらの歴史は、WFMSの卓越した業績であると同時に、近代的教育を受けた「新しい女性」が多く養成されたことによって、その国・地域のジェンダー史に画期的な意味を持つと言えよう。

しかし、アメリカやアジアにおける女子高等教育の成立過程を取り上げる先行研究において²、WFMSが実施した女子高等教育については、あまり明らかにされていない。もちろん、学校発展史的な観点から記述されたもの（『活水学院100年史』『青山学院五十年史』『梨花100年史』など）は少なくない。ミッション女子カレッジを設立した女性宣教師の伝記を挙げることもできる³。しかし、彼女たちの女子高等教育に関する認識については十分に明らかにされていない。

また、香川せつ子・河村貞枝（編）の研究では、各国に成立した女子高等教育を論じる際に、比較史的な観点から明らかにすること、それぞれの国・地域において女子高等教育を促進した社会的ダイナミズム（近代的なジェンダー論や女子教育論の登場、女性運動など）を明らかにすること、女子高等教育による女性の社会進出について明らかにすること、そして、女性高等教育がいかに世界的に波及したかを明らかにすること、この4つの視点が必要であると提起された⁴。しかし、女子高等教育を世界で広く実施したWFMSをはじめとする欧米女性による海外伝道組織（プロテスタント女性運動）に関しては、言及されておらず、研究の対象として認識され



WMF (1896, Nov.)

ていない⁵。

本稿は、WFMSにより東アジアで実施された女子高等教育について、WFMSの機関紙 *Woman's Missionary Friend*（以下、*WMF*と略す）、『年次報告』(*Annual Report*)、『年報』(*Year Book*)を用いて検討するものである。

第1章では、初等教育から女子カレッジまでのWFMSの女子教育が、中国、日本、朝鮮という3カ国でいかに実施されたかを比較する。女性宣教師たちの女子教育に関する基本認識については、拙稿

で明らかにしたため⁶、ここでは、3カ国の比較から明らかになるWFMSの女子教育の特徴を中心に論じる。

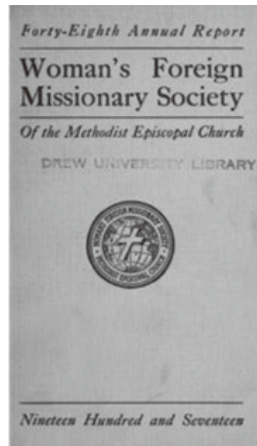
第2章では、WFMSが3カ国で設立した女子カレッジや、WFMSもかかわり、キリスト教プロテスタント教派連合で開設された女子カレッジ(ユニオン女子カレッジ)を取り上げる。ここでは、女子高等教育に関するWFMSまたは女性宣教師の認識を中心に考察する。

第1章 東アジアにおけるWFMSによる女子教育

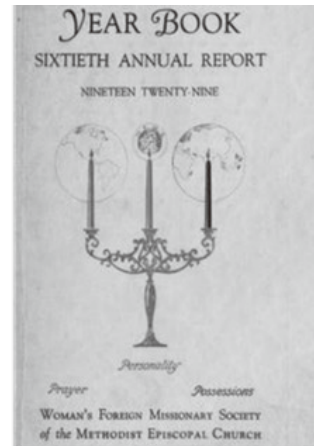
第1節 実態について

まず、WFMSは、中国、日本、朝鮮の3カ国においていかに女子教育を開始したかを見てみよう。中国の場合、日本と朝鮮とは違って、WFMSの女性宣教師に先んじて派遣された同派教会(アメリカ北部メソジスト監督教会)の宣教師により女子教育が開始された。すなわち、二人の牧師(Henry Hickock、Robert S. Maclay)が1847年に福建省の福州に派遣され、マクレイ牧師の妻が1850年12月末に6人の女子生徒の初等教育を始めたのである。また、1859年に同派教会から未婚の二人の女性宣教師(姉妹であるBeulah WoolstonとSarah Woolston)が加わり、同年11月に中国における同派教会の最初の女学校(寄宿学校)を福州に開設した。彼女たちは、社会の冷淡な反応に苦しみながらも入学者を増やしていくが、病に倒れ、一時期アメリカに帰国した。そののち、1871年にWFMS所属の女性宣教師として福州女学校に赴任した⁷。

日本には1874年11月、WFMSよりドーラ・E・スクーンメーカー(D. E. Schoonmaker)が派遣された。彼女は日本に到着して数週間後に女子教育にとりかかり、東京(麻布)に女子小学校を開設した。以後、数回にわたり移転し、学校名も救世学校、海岸女学校へと改称されたが、1888年



WFMS『年次報告』
(1917)



WFMS『年報』
(1929)

に海岸女学校の上級生のために青山に東京英和女学校を開校するまで発展していった。東京英和女学校（後の青山女学院）では、数学のレベルがやや低く、ラテン語やギリシア語の代わりに漢文が教えられた点を除けば、大体アメリカの女子セミナーに比肩する教育が行われた⁸。また、同じく日本では、1879年にWFMSからエリザベス・ラッセル（E. Russel）が長崎に派遣され、同年に女子教育（後に活水女学校）を開始した。1887年に中等課程、1889年に高等科（カレッジ課程）が設けられた。

朝鮮にはWFMSより1885年6月にメリ・F・スクラントン（M. F. Scranton）が派遣されたが、女子生徒が集まらず、女子教育はやっと翌年5月末に一人の生徒でスタートした（後に梨花学堂）。中等課程も中国と日本に比べてかなり遅れ、1904年に開設された。

以上のようにWFMSは、19世紀半ばから後半にかけて東アジア3カ国で女子教育を始めた。それ以降、WFMSは各国の地方にWFMSの組織として協議会（コンファレンス）を次々に開き、それぞれに女子学校を開設して、女子教育の成果を着実にあげていった⁹。

表1 東アジアにおけるWFMS開設女子教育機関

年度	国・地域	女性宣教師数			学校数						教師数			生徒・学生数					
		未婚	既婚	小計	幼稚園	初等	中等	カレッジ	その他	小計	宣教師	現地人	小計	幼稚園	初等	中等	カレッジ	その他	小計
1912	中国	91	16	107	40	264	18	2	1	325	48	413	461	97	5,457	1,858	51	48	7,511
	日本	34	11	45	8	7	6	1	2	24	22	185	207	507	1,190	685	59	248	2,689
	朝鮮	26	16	42	-	95	4	1	-	100	12	68	80	-	1,539	226	11	-	1,776
	小計	151	43	194	48	366	28	4	3	449	82	666	748	604	8,186	2,769	121	2,072	11,976
1915	中国	120	22	142	15	361	19	1	1	397	66	561	627	434	8,618	2,147	106	50	11,355
	日本	39	10	49	11	7	6	1	1	26	2	174	176	528	1,226	801	31	57	2,643
	朝鮮	25	16	41	1	60	3	1	-	65	7	132	139	70	2,648	524	15	-	3,257
	小計	184	48	232	27	428	28	3	2	488	75	867	942	1,032	12,492	3,472	152	107	17,255
1920	中国	145	17	162	20	335	24	4	3	386	66	680	746	631	8,898	2,597	267	145	12,538
	日本	42	6	48	14	5	7	2	5	33	19	185	204	821	853	1,310	40	120	3,144
	朝鮮	23	8	31	11	33	2	1	-	47	13	140	153	265	2,123	250	60	-	2,698
	小計	210	31	241	45	373	33	7	8	466	98	1,005	1,103	1,717	11,874	4,157	367	265	18,380
1925	中国	206	18	224	22	393	19	1	4	439	85	863	948	898	13,266	1,276	80	68	15,588
	日本	48	6	54	13	7	5	1	4	30	23	192	215	613	430	1,993	82	366	3,484
	朝鮮	45	14	59	8	80	3	1	5	97	14	240	254	1,426	4,865	222	19	415	6,947
	小計	299	38	337	43	480	27	3	13	566	122	1,295	1,417	2,937	18,561	3,491	181	849	26,019
1930	中国	131	6	137	30	343	26	1	5	405	76	905	981	1,309	13,612	1,848	104	107	16,980
	日本	32	6	38	15	-	5	1	2	23	21	218	239	967	-	2,224	110	89	3,390
	朝鮮	48	-	48	11	112	4	1	8	136	23	344	367	1,752	5,929	653	142	673	9,149
	小計	211	12	223	56	455	35	3	15	564	120	1,467	1,587	4,028	19,541	4,725	356	869	29,519
1935	中国	91	8	99	30	269	24	1	10	334	74	932	1,006	1,723	13,790	2,164	70	371	18,118
	日本	29	2	31	18	-	5	1	2	26	23	220	243	936	-	2,461	73	160	3,630
	朝鮮	27	4	31	14	87	6	1	2	110	22	322	344	2,922	5,416	1,288	249	98	9,973
	小計	147	14	161	62	356	35	3	14	470	119	1,474	1,593	5,581	19,206	5,913	392	629	31,721
1939	中国	85	4	89	38	173	20	1	3	235	38	807	845	2,212	11,805	2,524	86	80	16,707
	日本	27	4	31	22	-	6	1	2	31	22	250	272	1,242	-	2,656	53	214	4,165
	朝鮮	30	11	41	37	91	3	1	8	140	17	371	388	3,140	9,307	938	239	800	14,424
	小計	142	19	161	97	264	29	3	13	406	77	1,428	1,505	6,594	21,112	6,118	378	1,094	35,296

出所：WFMS, *Annual Report, 1912-1915 & Year Book, 1920-1939*.

注：①その他とは、実科・芸芸学校またはその課程、特殊教育学校（盲児学校など）またはその課程、中等課程以上の専門課程、師範課程など。

②教師数のうち、宣教師には英語ネイティブ教師も含むが、その数は少ない。

③幼稚園数に初等学校の併設幼稚園も含む。初等学校の併設幼稚園が1園以上でその正確な数が判明できない場合、1園として数える。よって、幼稚園数は実際には表記より多いと思われる。

④同じ学校に下級から上級課程まで開設された場合、それぞれ別の学校として数える。

⑤1925年以降のカレッジ学校数および学生数は、WFMSがかかわるユニオン女子カレッジは含まない。ただ、朝鮮に開設された女子カレッジは、1933年度以降、ユニオン女子カレッジに転換したが、3カ国の比較のために示す。

⑥1915年度、日本における教師数のうち、カレッジにおける宣教師教師数および現地人教師数が不明につき含まれていない。

(表1)は、WFMSの『年次報告』(1912-15)と『年報』(1920-39)に基づいて、中国、日本、朝鮮で展開された女子教育をまとめたものである。『年次報告』は1878年度から刊行されたが、それ以前には年次会議の『議事録』が刊行された¹⁰。1912年度以降、『年次報告』に各国・各地域におけるWFMSの教育活動が体系的に記されるようになった。また、『年次報告』は1919年度から『年報』に代わり、1939年度まで続く。(表1)では、1912年度、1915年度、1920年度、1925年度、1930年度、1935年度、1939年度を選別し、女性宣教師数(未既婚別)、学校数(幼稚園からカレッジまで、その他)、教師数(宣教師、現地人別)、生徒・学生数(幼稚園からカレッジまで、その他)を示した。

日本と朝鮮に比べ、中国に渡った女性宣教師は圧倒的に多く(一時期は4倍以上)¹¹、学校も女子学生も多い。1912年度、中国に幼稚園40校、初等学校264校、中等学校18校、カレッジ2校、その他(実科・技芸学校など)1校が開設されており、その合計325校に在籍する生徒・学生は7,511人である。それに比べて、日本の場合は、幼稚園8校、初等学校7校、中等学校6校、カレッジ1校、その他2校(合計24校)の全体在籍者は2,689人である。朝鮮の場合は、初等学校95校、中等学校4校、カレッジ1校(合計100校)の全体在籍者は1,776人である。日本より朝鮮に学校が多く設立されたが、在籍者は日本よりかなり少なかった¹²。

1939年度になると、中国235校(在籍者16,707人)、日本31校(在籍者4,165人)、朝鮮140校(在籍者14,424人)の規模に達しており、25年以上に亘ってWFMSにより実施された女子教育は、東アジアで発展し続けた。中国におけるWFMSの学校は減ったものの、その学校で学ぶ女子生徒・学生は2倍以上になった。日本でもWFMSの学校に通う生徒・学生は、年々少しずつ増加した。しかし、学校も、在籍者も、中国や朝鮮に比べれば、その伸び方は緩やかであった。

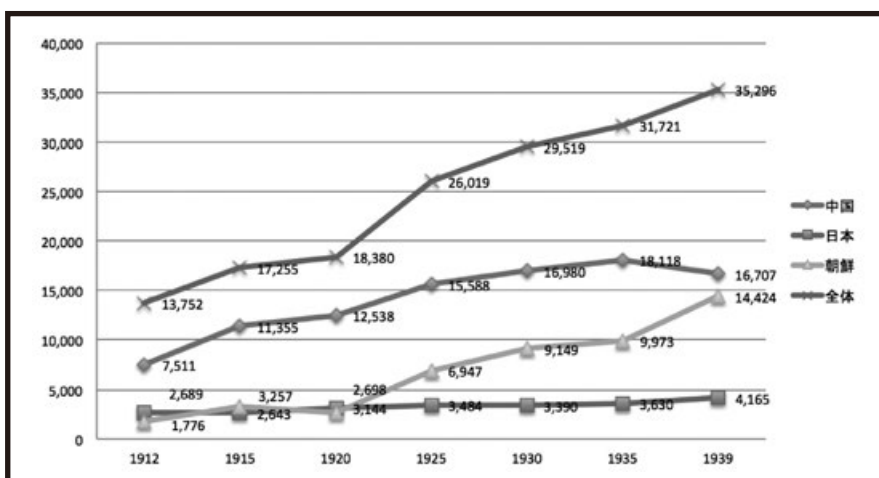


図1 東アジアにおけるWFMS開設女子教育機関の学生数の推移

出所：WFMS, *Annual Report*, 1912-1915 & *Year Book*, 1920-1939.

急激な変化をみせたのは、朝鮮の方であった。(図1)は、WFMSが東アジアに開設した女子教育機関における在籍者の推移で、WFMSが女子教育にいかに関与したかがわかる。特に朝鮮では1910年代前半、1920年代前半、1930年代後半に女子教育が飛躍的に発展(在籍者の急増)した傾向が見られるが、それはあくまでも初等教育の拡大によるものである。中等教育の発展は同様には伴わず、地域の住民たちの教育熱(娘をミッション・スクールで教育させたい)に十分に届かないのが、女性宣教師たちの大きな失望であり悩みであった¹³。

第2節 特徴として

WFMSにより東アジアで実施された女子教育の特徴を見てみよう。まず、中国と朝鮮においては初等教育が、日本においては中等教育が中心になっていた。この側面は、それぞれの国・地域に教育事業が拡大されていく際にも維持され、1939年度、中国では全体教育機関(235校)のうち、初等学校は173校(73.6%)、朝鮮では全体教育機関(140校)のうち、91校(65%)が初等学校であった。日本では、1926年度以降は初等教育から撤退し、中等教育に専念することになった。1939年度、中等教育機関の在籍者(2,656人)は、全体4,165人の63.8%である。

なぜ、このような特徴が生じたか。中国と朝鮮に比較して、日本では国家による女子教育がいち早く発達し、官公立小学校における女子生徒の就学率は、学制公布(1872年)の翌年に15.1%であったが、1878年には23.5%に増加し、1905年には男女生徒の小学校就学率は95%以上に達した¹⁴。こうした女子教育の状況をうけ、女性宣教師たちは、女子教育を開始して間もなく、初等教育より中等教育に力を入れる考えを持つようになった。上述したように1879年に長崎に派遣され、女子教育をはじめたラッセルは、開校以降設けてきた様々な教科を編成し、1887年に中等課程を設置した。その前年、彼女は中等教育重視の考えを本部へ次のように述べた。

長崎学校を高いレベルの学校に発展させることは私たちの願いであり、そのために私たちは一丸となって働いている。日本政府は小学校のレベルを高くあげることにとても積極的である。全国で小学校が開設されているが、私たちは、この公立小学校を卒業した子どもたちが、私たちの長崎学校や他のミッション・スクールに入学するようにしなければならない。公立中等学校はまだ全国に建てられていないが、それはその必要性がまだ認められていないからである。まず子どもたちが日本の公立小学校に入学するように促しながら、私たちは私たちの学校を優れた女学校に発展させなければならない¹⁵。

上記の(表1)から分かるように、日本におけるWFMSの初等学校は増えず、1926年からは初等教育から手を引いた。その反面、朝鮮においては、初等教育が中心になっており、中等教育の発展は制約されていた(学校数は増えず、ただ在学者は増加)。このことに関連して、1910年、日

韓併合後の1913年度の『年次報告』では、以下のような認識が示された。つまり、初等教育は宣教・福音化のためにも、初等教育からカレッジまで一貫して教育を行うためにも重要である。しかし、WFMSの初等学校は、施設不備など遅れている点がある。今後、数的にも質的にも発展を成し遂げていくはずの公立初等学校に競合できるように、改善していかなければならない。本来持つ初等教育の意味や朝鮮における教育状況を踏まえ、初等教育を充実させることを訴えたのである。

朝鮮総督府は学校を建て、教科書を刊行するなど、子どもたちを就学させようと数々の策をとっている。学校と教会は共に進む。子どもたちが公立学校に入学すれば、彼らは私たちを忘れるだろうし、明日の教会は今日の子どもの福音化による。教育事業の第一の基礎はデイスクールである。もし、デイスクールが閉校になれば、あまり時間が経たないうちに中等学校もカレッジも必要ではなくなるだろう。デイスクールは今のように運営させてもらえないだろう。なぜならば、朝鮮総督府が適切な広さの敷地、建物、施設を要求する法を制定したからだ。……昨年、総督府の人が私たちの学校の一つに視察に見えた時、こう言った。「あなたたちには学校がなく、子どもだけがいる」と。子どもたちだけが。はい、そうです。神様、感謝いたします。私たちに子どもたちがいます。神様が子どもたちを送ってくださいました。私たちは彼らのために何をしなければならないのか。建物を建て、設備を整える？ 私たちはそうしなければならない。そうしないと、学校を閉じなければならない。この地の隅々から女子児童や男子児童が目覚まして学校に行こうとするとき、彼らは私たちの学校か、公立学校へいくのに、私たちが閉じてしまったらどうなるだろうか¹⁶。

次に挙げたい特徴は、1910年代初期に、中国、日本、朝鮮それぞれにWFMSの女子カレッジが設立されていた点である。これは、初等学校から中等学校へ、さらにカレッジへという、ピラミッド型の近代教育制度が女性宣教師によって東アジア3カ国に確立されたことを意味する。当

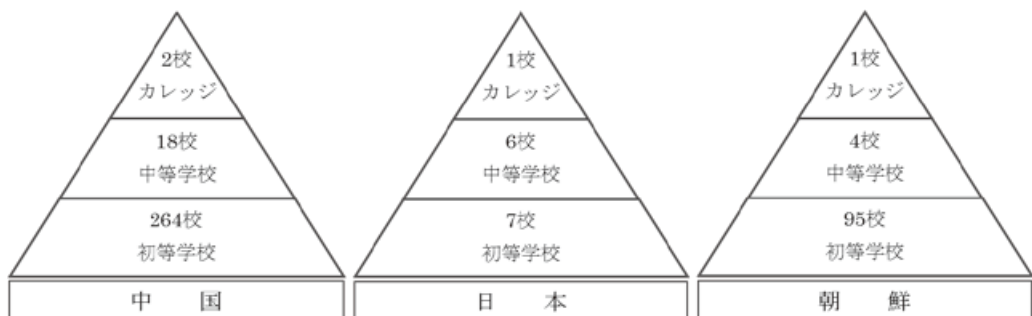


図2 東アジアにおけるWFMSが作り上げた「教育ピラミッド」(1912年)

時、中国、日本、朝鮮に WFMS が作り上げていた「教育ピラミッド」を図で示すと、(図2)の通りである。

日本では上述したように、WFMS は 1889 年に活水女学校に高等科（カレッジ課程）を開設した。これに関して、女性宣教師は、アメリカ本部に「活水に幼稚園からカレッジまでが設置された。活水では、驚くほどの多くの学生が美術、音楽、英語を学びたがっている」¹⁷と報告した。また、日本では、政府による女子高等教育（女子高等師範学校）も 1890 年に開始され、WFMS による「教育ピラミッド」も、国家による「教育ピラミッド」も、中国や朝鮮より早く成立した。

中国では、WFMS の福州女学校（1859 年設立）に赴任した女性宣教師の間に 1880 年代にカレッジ設立が構想され、1899 年に中等科より上級課程の学校（the Foochow Conference Seminary）が開設された。しかし、カレッジへと発展せず、1906 年に閉校となった。華南女子大学（Woman's College of South China）の設立は、1904 年に WFMS 本部の承認を受け、1908 年にその予科が開設された¹⁸。

これについて、「ずっと前から夢見てきたカレッジが現実になってきた。私たちは、私たちの学生たちが、初等学校から中等学校へ進み、さらに師範科やカレッジまであがっていくのを見たいのだ」¹⁹と述べられた。その一方、中国政府による女子高等教育は、1918 年に女子高等師範学校が開設されるまで開始されておらず、日本に比べれば、女子高等教育（WFMS によるものも、国家によるものも）は、遅れて成立した。

朝鮮においては、より遅れて 1910 年に WFMS の梨花学堂に大学科（カレッジ課程）が開かれた。これに関して、女性宣教師はアメリカ本部に、「フレイ（L. Frey）宣教師が再び朝鮮に来たので宣教師たちはみ



活水女子大学
Mary Isham (1936) より



華南女子大学
Mary Isham (1936) より



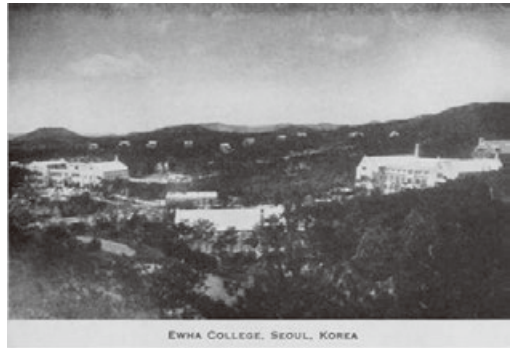
華南女子大学生
WNF (1922, Oct.) より

な喜びに溢れている。6年前、フレイとマーカー (Miss Marker) 宣教師は、梨花学堂のベランダに座って、学校発展について計画した。それから遠くない未来に彼女らは女学校、カレッジを見ることができた。彼女たちは、やっと夢が実現したことの嬉しさを満喫している。幼稚園からカレッジ (文学、科学、芸術、音楽、実科) まで、すべての課程が設置されており、全国から集まった学生は 222 人である」²⁰ と報告した。

梨花学堂大学科は、1925 年に専門学校として朝鮮総督府の認可を受ける。しかし、朝鮮総督府による女子高等教育は実施されなかった²¹。以上の WFMS の女子高等教育に関しては、次章でより詳しく述べる。

もう一つの WFMS による女子教育の特徴としてあげなければならないのは、現地人女教師の養成である。WFMS が宣教地で養成した女教師には、典型的に 3 部類が存在する。つまり、WFMS の中等学校を卒業して出身地の WFMS の初等学校へ赴任する者、WFMS のカレッジを出て WFMS の中等女学校へ赴任する者、WFMS の中等女学校またはカレッジを出てアメリカか日本に留学したのち母校のカレッジまたは中等女学校の教員になる者が、それである。

宣教地で WFMS の女子学校が増えていけば、当然、現地人教師が必要になってくるし、その供給源は言うまでもなく卒業生である。現地人女教師は、WFMS の「教育ピラミッド」を維持・拡充するために不可欠な存在である。何人の卒業生を輩出したかは、女子教育事業の成果として、各宣教地の女性宣教師たちは本部に毎年必ず報告している。その中で、卒業生は教師をはじめ、どのような分野に進出したかを繰り返し報告した。例を挙げると、以下の通りである。



梨花女子大学
Mary Isham (1936) より



梨花学堂大学科の卒業生 (第 1 回)
WMF (1921, Jan.) より

(華南女子大学) 今年の 1 月に 15 人が卒業したが、全員が私たちのミッション・スクールの教師となった。……カレッジ卒業後の進路も考えて、在学生たちは、23 か所 (1000 人以上の子ども) の教会の日曜学校で教えている²¹。

活水女学校は、エリザベス・ラッセルの産んだ子で、日本における女子高等教育の先駆けである。昨年、50人の卒業生は、東京と満州まで散らばっていった。一部はカレッジに進み、一部は教師になり、一部は結婚し、多くが職場についた²³。

17人の女性がカレッジ課程を卒業し、123人の女性がカレッジ課程の予科を卒業した。彼女たちの働きは本当に素晴らしいもので、全国に散らばっている梨花の卒業生の卓越性と献身ぶりは有名である²⁴。

以下の（図3）は、WFMSが養成した東アジアにおける現地人女教師の推移で、初等学校が増え続けた中国と朝鮮において現地人女教師も多く養成されたことがわかる。

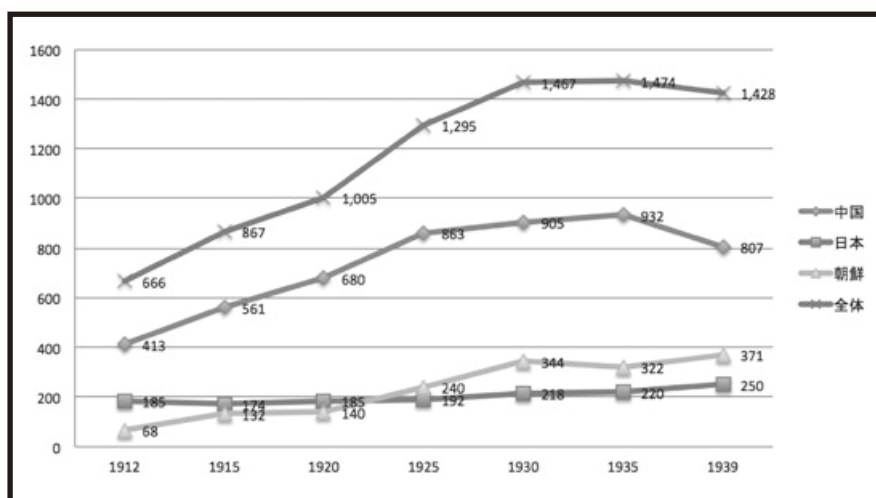


図3 WFMS 開設女子教育機関における現地人教女師数の推移

出所：WFMS, *Annual Report, 1912-1915 & Year Book, 1920-1939*.

第2章 東アジアにおけるWFMSによる女子カレッジ

第1節 実態について

WFMSは、上述した通り、宣教地でいち早く女子高等教育を実施した。それぞれの宣教地で国家による女子高等教育が実施される以前からカレッジ課程を設置し、「教育ピラミッド」を完成したのである。それは日本では1889年（活水女学校高等科）、中国では1908年（華南女子大学）、朝鮮では1910年（梨花学堂大学科）であった²⁵。

以後、WFMSは、日本において単独で運営する女子カレッジをそれ以上開設することはなかった。上述した青山女学院に1903年に英語専門科（カレッジレベル）が設置され、カレッジへと

発展していく可能性はあった。しかし、1910年にイギリスのエディンバラで開かれた世界宣教師大会で、東京に教派連合の女子カレッジを設置することが決定されたため、WFMSは青山女学院英語専門科をカレッジへ昇格させる構想は諦めた。1918年に東京女子大学がユニオン女子カレッジとして開校するに伴って、1920年に青山女学院英語専門科は閉じられた。のちに青山高等女学部専攻科として復活し、カレッジレベルの教育課程は継続されたが、WFMSのカレッジとして発展することはなかったのである。

中国では、女性宣教師たちは、福州の他、南京にもWFMSの女子カレッジを設立するため着実に働き続けた。1908年にWFMSの南京女学校（1900年に開校）にカレッジ課程の大学科（華中女子大学と呼ばれる）が開設された。後に、この大学科は教派連合の金陵女子大学（Ginling College）へと発展し、1915年に開校する²⁶。

中国には他にも教派連合の女子カレッジがいくつも設立された（表2参照）。設立が最も早かったのは、1905年に開校した北京の華北ユニオン女子大学（North China Union College for Women、1921年から燕京大学女子部 Yenching College for Womenへ）である。WFMSが運営に参加したのは、1918年または1919年頃からである。また、同じ時期に華北女子医科大学（North China Union Medical College for Women、1907年に開設、1924年から山東キリスト教大学医科大学 School of Medicine, Shantung Christian Universityへ合併）

の運営にも加わった。さらに、WFMSは、華西ユニオン大学女子部（Woman's College, Chengtu Union University、1924年に開設）にもかかわることになった。

要するに、WFMSが中国で単独で設立した女子カレッジは、1915年以前には2校（華南女子大学、華中女子大学）、1915年以降には1校（華南女子大学）のみである。また、WFMSが運営にかかわったユニオン女子カレッジは、1924年以前には3校（金陵女子大学、華北ユニオン女子大学、華北女子医科大学）で、それ以後、華西ユニオン大学女子部が加わり4校になる。

朝鮮でWFMSが開設した梨花女子大学は、1933年以降、教派連合の女子カレッジへ転換した。朝鮮では他にWFMSの女子カレッジは設立されず、アメリカ北部長老教会中心の平壤大学（各種



青山女学院英語授業
WMF (1923, Feb.) より



金陵女子大学生
WMF (1927, July) より

学校としての崇實専門学校) 女子部 (1930年に開設) にも、WFMS はかかわることがなかった。

以上のように、戦前、WFMS が東アジアで単独で開設した女子カレッジおよび運営にかかわったユニオン女子カレッジは、合計 8 校である。それを図で示すと、以下の通りである。1932 年度 (最も在籍者が多い年、表 2 参照) 8 校の女子カレッジの在籍者数を比較すると、最も多いのは東京女子大学 (496 人) で、次いで梨花女子大学 (300 人) である²⁷。



図 4 東アジアにおける WFMS 管轄下の女子カレッジ (1932)

出所：WFMS, *Year Book*, 1932 に基づいて作成

WFMS は、ユニオン女子カレッジ設立の意味について次のように述べる。つまり、東洋の女性リーダーは、東洋の地で設立されたカレッジで養成されるべきであるという。アメリカ人女性は、そのカレッジを設立・支援し、東洋の女性リーダーたちを東洋社会に送り、東洋の発展に貢献するという。

これらの女子カレッジは、東洋の 4 億の女性たちに、クリスチャンリーダーを供給する源である。もし、東洋に変化を導こうとするならば、私たちはクリスチャン教師、編集者、医師、改革者、宣教師、教育を受けた母を養成しなければならない。私とあなたがそこに行っても東洋を変化させることはできない。東洋の女性たちがこの働きをしなければならないし、私とあなたは、東洋の女性たちを、ユニオンクリスチャンカレッジで育てなければならない²⁸。

神様の助けを受けクリスチャンリーダーを育てることが私たちの目的である。…… (東洋の)

クリスチャンリーダーは、東洋で養成されなければならない。養成のための最も良い場所は、そのリーダーたちが働き、影響力を発揮するその地である。アメリカのクリスチャン女性は、東洋の女性たちにクリスチャンリーダーを供給するためにカレッジを発展させ、その数も増やしていかなければならない。メソジスト監督教会のすべての組織とともに、WFMSは、他教派と組んでユニオン女子カレッジを支援している²⁹。

このようなアメリカ人女性たちの熱情（アメリカ人女性の手によって東洋女性のために東洋にカレッジを設立する）は、カレッジを求める東洋女性の熱望に応えるものでもあった。「『私はカレッジに入学しなければなりません。何かを成し遂げなければなりません。もしあなたが私にそれを許さなければ、私は病に陥り、不幸になるでしょう』。これは若い女性たちの強い気持ちを打ち明けた嘆願である。これは今日の中国の若い女性たちの叫び声である。しかし、これは中国だけに起こっている新しい現象ではなく、インドや他のすべての東洋にも同様なことが起こっている。歴史上初めて、女性解放が様々な不平等な分野にわたって叫ばれている。東洋女性たちは彼女たちの鎖を断ち切っているが、もし、真理が彼女たちを自由に導いていかなければ、今の彼女たちの置かれている状態は、むしろ以前より悪くなるでしょう。……訓練されたリーダーが、このような女性解放という新しい要求を導いていかなければならない。アメリカのクリスチャン女性は、このような危機に目を覚まし、東洋の7つのユニオンクリスチャンカレッジの発展と拡張のために動かねばならない」³⁰と。

以下の（表2）は、WFMSが東アジアで単独で開設した女子カレッジ、また、運営にかかわったユニオン女子カレッジにおける学生数を示したものである。そして、その推移をあらわしたの

表2 東アジアにおけるWFMS管轄下の女子カレッジ

年度	国・地域	WFMS 開設女子カレッジ		WFMS がかわるユニオン女子カレッジ		合計		備考
		学校数	学生数	学校数	学生数	学校数	学生数	
1912	中国	2	51			2	51	1905年、華北ユニオン女子大学が開設される。WFMSはこの時点では参加していない。
	日本	1	59			1	59	
	朝鮮	1	11			1	11	
	小計	4	121			4	121	
1915	中国	1	106			1	106	この年、南京女校大学科が、金陵女子大学として発足。しかし、同年の『年次報告』にその統計なし。
	日本	1	31			1	31	
	朝鮮	1	15			1	15	
	小計	3	152			3	152	
1920	中国	1	145	3	122	4	267	東京女子大学は反映されていない。
	日本	1	23	1	17	2	40	
	朝鮮	1	60	-	-	1	60	
	小計	3	228	4	139	7	367	
1930	中国	1	104	4	151	5	255	
	日本	1	110	1	432	2	542	
	朝鮮	1	142	-	-	1	142	
	小計	3	356	5	583	8	939	
1935	中国	1	70	4	297	5	367	朝鮮における梨花女子大学は、1933年以降、ユニオン女子カレッジへ転換。日本におけるユニオン女子カレッジ学生数は、とり方の関係で前年度より急減したと推測。
	日本	1	73	1	92	2	165	
	朝鮮	-	-	1	249	1	249	
	小計	2	143	6	638	8	781	
1939	中国	1	86	4	327	4	413	中国における華西ユニオン女子大学の統計なし。
	日本	1	53	1	398	2	451	
	朝鮮	-	-	1	239	1	239	
	小計	2	139	5	964	7	1,103	

出所：WFMS, *Annual Report*, 1912, 1915; *Year Book*, 1920-1939

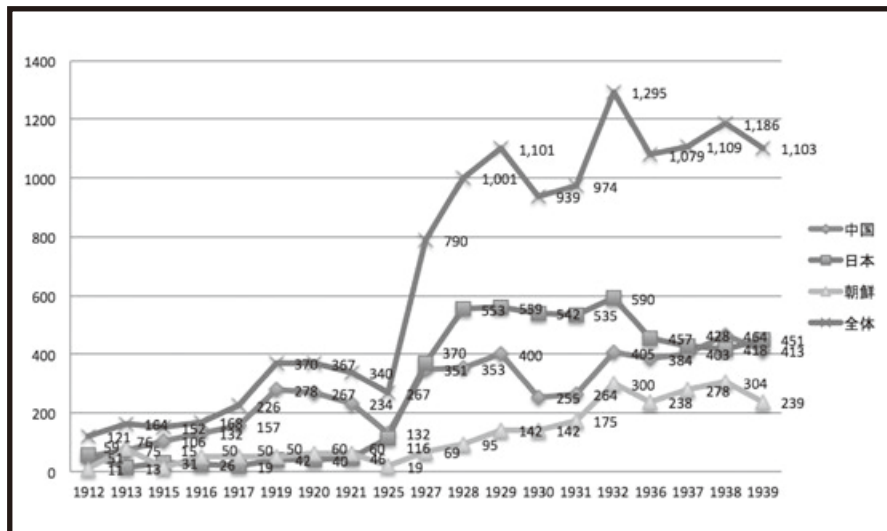


図5 東アジアにおけるWFMS管轄下の女子カレッジ学生数の推移

出所：WFMS, *Annual Report*, 1912-1917 (1914、18年度は未入手)；
Year Book, 1919-1939 (1922、23、24、33年度はカレッジ統計の不備により表記しない。1934年度は未入手)

が(図5)で、理由は定かではないが、学生数が急激に増えたり(1926年)、減ったりした(1935年)年度を除いた。1912年に女子カレッジに在籍した女性は、中国、日本、朝鮮をあわせて121人であったのに対し、1939年には1,103人に増加した。1939年だけとってみると、日本における2校の女子カレッジ(活水女子大学と東京女子大学)に在籍した女性(451人)が、中国における5校の女子カレッジ(華南女子大学、金陵女子大学、燕京大学女子部、山東キリスト教大学医科大学、華西ユニオン大学女子部)に在籍した女性(413人)より多い。

第2節 認識について

ここでは、WFMSまたは女性宣教師たちは、東アジアにおける女子高等教育についてどのような認識を持っていたかを論じる。拙稿でWFMSは宣教地でなぜ女子高等教育を実施したかについて明らかにした。すなわち、女性宣教師たちは、アメリカ人女性がカレッジ教育を受けるのであれば、宣教地の女性も同様にカレッジ教育を受けるべきだと考えた。また、それをアメリカ人女性の手によって実現させることが、先進したアメリカ人女性たちの遅れた非キリスト教国家の惨めな女性たちに対して持つべき責務であると認識した。

また、女子ミッション・スクールの主な教育目的は、教育を受けた母や妻や主婦として、クリスチャンホームを形成する女性たちを育成することにあつたが、キリスト教の信仰を持つ人材を養成して教会や学校(ミッション・スクールなど)、社会に送り出すことも女子ミッション・スクールの重要な役割として認識した。たとえば、「カレッジの主な目的は、若い女性たちを教育し、家

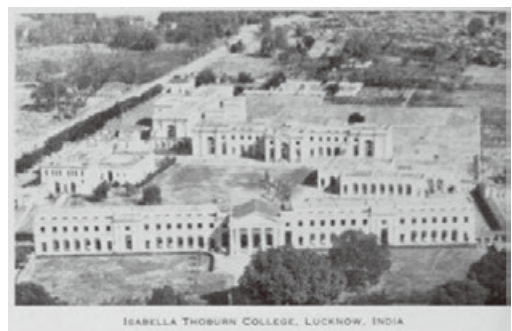
庭で、社会で、知的にまた靈的に自己の責任を果たすため全力を尽くす女性たちを社会に送り出すことだ」³¹と考えた。

さらに、女子カレッジの教育を受けさせ、クリスチャン女性を育てることは、その国のあり方を根本的に変えていくものになると見た。「(東京女子大学について述べる中で) イエス様の霊が豊かに働くクリスチャン国家日本になるのか、それとも軍事国家日本になるのか? 私たちは私たちのやるべきことをしよう。今はクリスチャン女性として、私たちの能力を一番近い東洋の隣人【日本を意味する】のために発揮する時で、私たちからの最高のプレゼントであるクリスチャン女性を養成し、東洋の隣人に送ろう」³²と。

このように、WFMSは東洋に女子カレッジを設立し、女性人材を養成することに大きな価値を認め自負の念を抱いた。その東洋女性たちの役割をアメリカの開拓時代の女性たちが果たした役割に重ね合わせたりもした。「新しい東洋がある。女性たち、すなわち、インド、中国、日本、朝鮮における教育を受けた女性たちは、新しい東洋を作ろうと努力している。これは、まるで私たちの祖母たちが夫とともに走って西岸の草原に着いたように、まるで祖母たちが死、水不足、疾病と闘ったように、まるで祖母たちが子どもたちに機会を与えようと小さな煉瓦の学校を願ったように、この新しい東洋の女性たちも学校の建物、教育課程、医療、工場や都市のより改善された環境(児童労働をなくすための)を求めている。これらのすべては、あなたと私が私たちと私たちの子どものために求めているものであるように、東洋女性たちもそうである。この東洋女性たちはどこからビジョンを得るだろうか」³³と。

この節では、WFMSの女子高等教育に関する考えをさらに掘り下げるため、まず、東洋に設立された女子カレッジの発展のために行った活動を取り上げる。次に、WFMSが東アジアで女子カレッジとして最初に開設した活水女子大学をはじめ、日本に設立された女子カレッジに対する女性宣教師の思い・考えを考察し、日本の女子カレッジの意義に関する女性宣教師の考えについて検討する。

上述したように、WFMSは1915年以降、単独にカレッジを新しく設立することはせず、中国や日本におけるユニオン女子カレッジの設立・運営に力を注いだ。1915年頃、WFMSがかかわる女子カレッジは、中国に2校(華南女子大学、金陵女子大学)、日本に1校(活水女子大学)、朝鮮に1校(梨花女子大学)の他、インドの1校(Isabella Thoburn College)を入ると、合計5校であった。このように東洋に女子カレッジが多く設立されると、WFMSはこれらの女子カレ



Isabella Thoburn College
Mary Isham (1936) より

ジを支援するための運動を行う。

まず、1915年に始めた、姉妹カレッジ支援運動 (the Sister College Movement) がある。「あなたの小遣いを (東洋の女性と) シェアしよう」(Share your spending money) というプランを立て、多くのアメリカ女子大学や女子大学生に呼びかけたのである。この運動の詳細は今後明らかにしなければならないが、1921年、45校のアメリカの大学が東洋の姉妹大学に支援を送った³²。その支援とは、金銭的な支援の他、姉妹女子カレッジに年に1度プレゼントを送る、そこの女子学生と手紙を交換するなど、東洋女性たちが必要とすることが何かを知り、それに応え、彼女らを助ける、「ビッグシスターになろう」³⁵ という意味を持った。

次に、1930年にWFMSは、海外カレッジ支援運動 (College Abroad Movement) を始めた。次の引用から分かるように、この運動は、アメリカ人女性たちが海外のカレッジを財政的に支援するだけではなく、WFMSがかかわるカレッジの在學生をアメリカに招き、交流することを目的とした。「第61回の年次執行委員会 (1930年) で、カレッジ・アブロード・ムーブメントを立ち上げることが決まった。この運動は、5つの女子大学 (Ewha College, Hwa Nan College, Woman's College of West China, Chengtu, Isabella Thoburn College, Kwassui College) を財政的に支援する計画を超える運動だ。これはアメリカ、中国、インド、日本、朝鮮から若い女性たちを集め、互いに知るように助け、互いに友たちになる機会を与え、習慣、言語、背景が異なる彼女たちがより広い世界的なビジョンを持つようになるための促進運動だ」³⁶ と。このように、西洋 (アメリカ) と東洋の女子大生、また、東洋における多国家・多民族・多文化からの女子大生の交流をはかり、彼女たちが世界的な視野とビジョンを共有することが目指された。その中でも、アメリカの女子大生が、東洋の姉妹たちの問題に関心を持つようになることが重要視された³⁷。

以上のように、WFMSは東洋の女子カレッジを支援する活動を行う中で、アメリカ人女性は「ビッグシスター」として東洋女性を助け、彼女らの求めに応えるだけではなく、東洋女性と交流を重ね、広い視野を持つ「真のビッグシスター」なるよう促していたことがわかる。これらの活動と意識の詳細は、今後、さらなる検討を必要とする。

その一方、WFMSは、活水女子大学などの日本の女子カレッジに対して、他の女子カレッジに対しては見られない特別な思い・考えを持っていた。上述した通り、活水女子大学は、WFMSが東アジアに最初に開設した女子カレッジであり、東アジアでWFMSが単独に運営した3校の女子カレッジのうちの1つである。また、日本でWFMSが単独に設立した唯一の女子カレッジであり、在學生も多かった。東京女子大学は、東アジアにおける日本 (東京) の国際的な地位を考慮し、1910年の世界宣教師大会で決議され設立された女子カレッジで、どの女子カレッジによりも在學生が多い。

1859年に開港場となった長崎には外国人が多く、活水女学校・女子大学には、多様な国籍 (中国、朝鮮、ロシア、イギリス、ドイツ、アメリカなど) の女子学生が入学することもあり、それ

が女性宣教師の中に「活水学校はコスモポリタン学校である」³⁸という認識を与えていた。また、活水女子大学や東京女子大学には、中国や朝鮮からの女子留学生も多数学んだ。このように日本の女子カレッジは他の国・地域の女子カレッジには見られない特性を持ち、女性宣教師の注目を引くに値した。

WFMSの女性宣教師（ここでは特に在日女性宣教師）は、日本が日清戦争や日露戦争に勝ち、朝鮮を併合して、東アジアの覇権国家として登場すると、宣教活動において日本の政治的・軍事的な地位を考慮するようになる。もちろん、その認識は当時の海外宣教組織に共通していた。たとえば、WFMSの1910年度『年次報告』に、世界宣教師代表者会議（The Commission of the World's Missionary Convention）の意見だとして、次のように述べられた。

日本の福音化は日本だけの問題ではない。世界福音化の戦略に深くかかわっている。冷静に東アジア全体を眺めてみれば、こう言わざるをえない。『日本のために行うことはすべて東洋のために行うことになる。私たちが日本で何かを行う時、それを迅速にやらなければならない。そうでなければ、私たちの近視眼を悲しむべきであろう。迅速に行動に移すことが絶対的に必要で、遅滞せず、日本が必要とする宣教師と教育施設を提供しなければならない』³⁹。

このような考えはWFMSの中からもあらわれ、「東洋は日本の手にかかっている。東洋の将来は日本がどうするかにかかっている。日本はダイナミックに変化している」⁴⁰と語られた。女性宣教師は、自分たちの日本での活動は東アジア全域に影響を及ぼすと展望したのである。

もちろん、こうした考えが具体的に活水女子大学や東京女子大学の運営にどのように反映されたかを知ることは容易なことではない。ただ、「活水は、公私立すべてを入れて日本で最も古い女子大学であり、なおかつ、東アジアで一番古い女子大学であるため、特別な存在感がある。日本で指導者として活動する卒業生を多く輩出しただけでなく、中国、朝鮮に渡って活動する指導者をも輩出した。他の東洋の女子大学の卒業生の中にロシア人がいるだろうか」⁴¹といい、設立当時から活水女子大学が享受してきた国際性（各国から女性たちが学びに集まる）や、国際性豊かな卒業生たちの活動をあげ⁴²、活水女子大学の存在に特別な意味を付与していた。また、「東京女子大学には309人の在生があるが、彼女らは満州、朝鮮、中国、台湾、そして35カ所の日本の各地域から来ており、鹿児島から来る学生は150カ所のトンネルを通過してきたのである」⁴³といい、東京女子大学は、日本女性を教育する全国規模の拠点であり、それ以上にアジア女性たちのための教育の拠点にもなっていると強調した。

しかし、活水女子大学や東京女子大学から日本を超え東洋に女性人材を送り出すという認識が、女性宣教師の間にどれほど確立され、それが両女子大学の教育や留学生の受入れにどのような影響をもたらしていたかは、今後、さらなる検討が必要である。

おわりに

本稿は、WFMS が東アジアで実施した女子高等教育の実態とそれに関する認識を明らかにしたものである。まず第1章では、WFMS により東アジア3カ国（中国、日本、朝鮮）でどの程度の規模の女子教育が行われていたか、それぞれにあった特徴は何かを比較した。第2章では、WFMS がその3カ国でかかわった女子カレッジ（WFMS が単独で設立・運営する女子カレッジやユニオン女子カレッジ）を取り上げた。設立経緯はもとより、東洋の女子カレッジに対するアメリカ人女性たちの思い・考えを明らかにした。

女性宣教師たちに見られる西洋中心の文明意識（東洋は野蛮で遅れている）や姉意識（アメリカクリスチャン女性が世界の惨めな女性を助ける）はさておき、アメリカ人女性たちの努力によって莫大な資金を要する女子カレッジを東洋に設立・運営して女子高等教育を実施したことは、19世紀半ば以降のアメリカ人女性たちの女性運動のうち、世界規模で行われた最も卓越した運動だったと評価できよう。なぜならば、それらの女子カレッジから多くの女性（とりわけ社会に進出して「女性の領域」を家庭とする当時のジェンダー意識を乗り越えていった女性）が、当時のもとより、現在も輩出されつづけており、その女性たちがそれぞれの国・地域に果たした役割は計り知れないからである。

世界における女子高等教育の歴史は、それぞれの国・地域の近代化や女性運動の歴史に結びついている。とりわけ、19世紀末から20世紀前半にわたってアメリカ人女性によって東アジアで実施された女子高等教育の歴史は、欧米発祥の女性たちの考えやビジョン（女性の役割論など）、また欧米の女子カレッジの中で構成された「知」の体系（教科課程など）が、こうしたミッション女子カレッジを通して世界に波及した、一種のグローバルな女性運動史であると言えよう。

こうした意味を持つこの主題は、今後、さらなる多角的な検証を要する。まず、WFMS により設立・運営された女子カレッジの教科課程などを詳細に検討・比較し、当時の女子高等教育のあり方を具体的に明らかにしなければならない。次に、WFMS の女子カレッジの設立にかかわった女性宣教師たち一人ひとりの生い立ち、教育歴や経歴、女子教育に関する考えなどを明らかにしなければならない。最後に、WFMS の女子カレッジから輩出された中国女性、日本女性、朝鮮女性にだれで、何をし、どのような認識を持ったかを明らかにしなければならない。

- 1 WFMS が行った海外宣教の歴史に関しては、Mrs. Rev. W. M. Bixby, *An Outline History of the Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church*, 1876; Isabel Hart, *Historical Sketches of Woman's Missionary Societies in America and England*, 1879; Mrs. M. A. Miller & Rev. J. J. Murray, *History of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Protestant Church*, 1896; Frances J. Baker, *The Story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1896*,

WFMS, 1898; Mary Isham, *Valorous Ventures: A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, WFMS, 1936; Missionaries of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, *Fifty Years of Light*, 1938 を参照。

- 2 これにあたる先行研究は多いので、ここでは特に例を挙げない。
- 3 棚村恵子『しなやかに夢を生きる—青山学院の歴史を拓いた人ドーラ・E. スクーンメーカーの生涯』青山学院、2004年；白浜祥子『長崎活水の娘たちよ—エリザベス・ラッセル女史の足跡』彩流社、2003年など。
- 4 香川せつ子・河村貞枝編『女性と高等教育—機会拡張と社会的相克』昭和堂、2008年。
- 5 日本で女子高等教育を実施したアメリカ人女性宣教師に関する先行研究として、石井紀子の研究がある。アメリカン・ボードが建てた神戸女学院において、アメリカ人女性宣教師により、19世紀末にいかにも高等教育が推進されたかが明らかになった。石井紀子「ウーマンフッドを越えて—明治期日本のアメリカ女性宣教師の高等教育推進に見られるプロフェッショナルリゼーション—」『アメリカ・カナダ研究』第19号、2002年、85-122頁。
- 6 朴宣美「朝鮮に渡ったアメリカ・プロテスタント女性宣教師—アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会を中心に—」筑波大学大学院人文社会科学研究所『歴史人類』第46号、2018年、103-126頁。
- 7 これらについては、Frances J. Baker, *Ibid*; Mrs. Rev. W. M. Bixby, *Ibid* を参照。
- 8 Frances J. Baker, *Ibid*, p.315.
- 9 1939年度、中国に7つのコンファレンス、日本と朝鮮にそれぞれ1つのコンファレンスが開かれていた（日本の場合1932年度まで西日本コンファレンスと東日本コンファレンスに分かれていた）。
- 10 米国国会図書館で確認される最初の『記事録』は、*Minutes of the Fifth Annual Meeting of the WFMS*, Boston: Office of "Hearthen Woman's Friend," 1874である。<https://archive.org/details/minutesoffifthan01woma/page/n1> 参照。
- 11 J. S. Dennis, H. D. Brach, C. H. Fahs, eds., *World Atlas of Christian Missions*, New York: Student Volunteer Movement for Foreign Missions, 1911, p.83によると、当時、すべてのキリスト教宣教師組織から中国に渡っていた女性宣教師は、医療関係（114人）の他、既婚（1,265人）、未婚（1,093人）、合計2,472人である。日本には、医療関係（1人）の他、既婚（309人）、未婚（353人）、合計663人、朝鮮には医療関係（12人）の他、既婚（94人）、未婚（71人）、合計177人が派遣されていた。教派関係なく、日本と朝鮮により、中国に圧倒的に多数の女性宣教師が派遣されていたことが分かる。
- 12 当時、キリスト教宣教師組織によって開設されたすべての女子教育機関にどれほど女子学生が在籍していたかを見よう（学校数は男女別に集計されていないため、ここでは省略する）。

まず、中国に女子カレッジ (23 人)、神学課程・師範課程など (928 人)、中等学校 (6,547 人)、実科・技芸科 (144 人)、初等学校 (8,452 人)、幼稚園 (96 人)、合計 16,190 人であった。日本に女子カレッジ (94 人)、神学課程・師範課程など (215 人)、中等学校 (4,167 人)、実科・技芸科 (175 人)、初等学校 (857 人)、幼稚園 (272 人)、合計 5,780 人であった。朝鮮に神学課程・師範課程など (150 人)、中等学校 (669 人)、初等学校 (3,075 人)、3,894 人であった (女子カレッジに該当学生無となっているが、1910 年に梨花学堂大学科が開設される以前のデータを集計した結果だと思われる)。つまり、1910 年代初期、全体ミッション・スタイルの女子学生の約 50% は、WFMS が開設した学校に在籍していた。WFMS は、派遣先の国家よりも、また、他のどの宣教組織よりも女子教育を重んじたと言える。J. S. Dennis, H. D. Brach, C. H. Fahs, eds., *Ibid*, 1911, p.83.

- 13 この点に関しては、拙稿 (2018 年) を参照。
- 14 文部科学省『学制百年史』1972 年参照。
- 15 “Nagasaki,” *Seventeenth Annual Report of WFMS of the Methodist Episcopal Church*, 1886, p.45.
- 16 “Korea,” *Forth-Four Annual Report of WFMS of the Methodist Episcopal Church*, 1913, p.182.
- 17 “South Japan Conference,” *Thirty-Second Annual Report of WFMS of the Methodist Episcopal Church*, 1900, p.170.
- 18 L. Ethel Wallace, *Hwa Nan College: The Woman’s College of South China*, United Board for Christian Colleges in China, 1956, pp.1-5.
- 19 “Foochow Conference,” *Thirty-Ninth Annual Report of WFMS*, 1908, p.148.
- 20 “Ewha School,” *Forth-Four Annual Report of WFMS*, 1913, p.182.
- 21 1935 年開校した京城女子師範学校を女子高等教育として見る見解もあるが、朝鮮には女子高等師範学校は設立されなかった。
- 22 “Colleges,” *Year Book, WFMS*, 1926, p.102
- 23 “Japan,” *Year Book, WFMS*, 1921, p.96.
- 24 “Korea,” *Year Book, WFMS*, 1922, p.73.
- 25 これらは学校名 (またはカレッジ課程名) において統一されていないが、WFMS の観点から見て、アメリカの女子大学と変わらない女子大学として認識された。
- 26 Lawrence Thurston & Ruth M. Chester, *Ginling College*, United Board for Christian Colleges in China, 1955.
- 27 各女子カレッジの英文表記 (在籍者数) は、次の通りである。梨花女子大学: Ewha Woman’s College or Chosen Woman’s College, Seoul, Korea (300)、東京女子大学: Woman’s Christian College, Tokyo, Japan (496)、活水女子大学: Kwassui Woman’s College, Nagasaki, Japan (94)、燕京大学女子部: Yenching College for Women, Peiping, China (19)、山東キリスト教大学医科大

- 学：School of Medicine, Shantung Christian University, Tsinanfu, China (60)、華西ユニオン大学
 女子部：Woman's College of West China or Woman's College, Chengtu Union University, Chengtu,
 China (25)、金陵女子大学：Ginling College, Nanking, China (191)、華南女子大学：Hwa Nan
 College, Foochow, China (110)
- 28 Mrs. Henry W. Peabody, "Building Colleges for the Women of Asia," *WMF* (1921, Dec.), p.428.
- 29 "Union Colleges," *Year Book, WFMS*, 1921, p.91.
- 30 Evelyn Riley Nicholson, "Why Union Christian Colleges in the Orient," *WMF* (1921, Nov.), p.382.
 7つのユニオンカレッジとは、中国の3校（Yenching College, Ginling College, Woman's Union
 Medical College）、インドの3校（Isbella Thoburn College at Lucknow, Woman's Christian College
 at Madras, Union Missionary Medical College for Women at Vellore）、日本の1校（Woman's
 Christian College at Tokyo）のことである。
- 31 "Union Colleges," *Year Book, WFMS*, 1937, p.75.
- 32 "Women's Union Christian Colleges in the Orient, II," *WMF* (1922, Oct.), p.355.
- 33 Grace Nies Fletcher, "Are the College Abroad Worth While?," *WMF* (1932, Jun.), p.210.
- 34 Mrs. H. D. Bollinger, "Sister Colleges," *WMF* (1937, Mar.), p.110.
- 35 注32と同じ。
- 36 Mabel R. Diefendorf, "The College Abroad Movement-An Adventure in Faith," *WMF* (1931, Jan.),
 p.21. 東洋の7つの女子大学（インドに3校、中国に3校、日本に1校）を支援する運動も他
 にあったが、これに関しては、小檜山ルイ「アメリカ的帝国の形成と女子高等教育の越境」
 『キリスト教社会問題研究』第62巻、2013年、63-82頁を参照。
- 37 "College Abroad Movement," *WMF* (1932, May), p.169.
- 38 "South Japan Conference," *Thirty-Ninth Annual Report of WFMS*, 1908, p.168.
- 39 "South Japan Conference," *Forth-First Annual Report of WFMS*, 1910, p.183.
- 40 "Japan," *Year Book, WFMS*, 1929, p.35.
- 41 Anna Laura White, "Kwassui College," *WMF* (1931, Apr.), p.125.
- 42 活水女子大学卒業生が他のアジアの国々に渡って活躍していることは、他にも頻繁に報告
 された。"Japan", *Year Book, WFMS*, 1919, p.96; Miss Eloise Smith and Miss Bertha Starkey, "In
 Manchoukuo," *WMF* (1935, Mar.), p.109; "Colleges," *Year Book, WFMS*, 1937, p.69 など。
- 43 Myrtle Z. Pider, "A Short Call at Oriental College," *WMF* (1928, Apr.), p.139.